

# *Nisei Daughter* の母の歌 ——第二次大戦中の短歌を中心に——

糸井 輝 子

## はじめに

モニカ・ソネ (Monica Sone, 1919-2011) の自伝, *Nisei Daughter* (1958年初版)<sup>1</sup> は、アジア系アメリカ人研究コースの必読書の一つである。本書は、一人の女性の成長物語ではあるが、ニセイ<sup>2</sup>という言葉から、アメリカ市民ではあるが日系であるためにアメリカ社会では周辺化されていること、娘という言葉から、一世との親子関係、そしてジェンダーで周辺化されていることが、その題名から示唆されている。本書は、自分はヤンキーだと思い込んでいた一人の少女が、母親からジャパニーズ<sup>3</sup>なのだから日本語学校へ通うように、と言われて衝撃を受けるところから始まる。ヤンキーであると同時に、ジャパニーズであることは、両立しえないし、二つが同時に一人にあってはならないはずだ、と自らのジャパニーズ性に憤り、悩む。ヤンキーとして生きたい／ヤンキーとして受け入れられたい、という思いとは裏腹に、周囲からジャパニーズだと決めつけられ、その狭間で混乱し葛藤する。内部分裂し混乱していた少女は、日米戦争勃発、強制立ち退き、収容、再定住を経て、ようやく、自分のなかの、ジャパニーズである部分とアメリカ人である部分が一つに混合し、全き人間になったと語れるまでに成長を遂げる。

これまでの研究では、アジア系に対する人種差別、日系人に対する戦時強制収容、あるいは周辺化された人間のアイデンティティの模索やマイノリティの同化という視点から、本書は論じられてきた。分析の対象は語り手のモニカ・ソネに焦点が当てられてきた。しかし「娘」という言葉に内包される「親」の存在、とくに、作品の冒頭で、語り手にジャパニーズだと宣告する「母親」の存在は無視できない。

語りの中で、母親、イトイ夫人は、シアトル市の日本人移民社会の中では若い世代に属し、他の一世夫人たちに比べて、劣位に置かれている。ところが、実際のシアトルの日系社会では、この母親は、糸井野菊として、現地の日本語新聞に寄稿したり、短歌を詠んだり、教会で活動したり、一目置かれる存在だった<sup>4</sup>。そこで、本稿ではこの母親に焦点をあてて、母親自身が残した短歌を資料として、一世の母親、糸井野菊とその自画像について考察したい。最初に *Nisei Daughter* が描くイトイ夫人像を概観し、続いて、日米戦争中の糸井野菊の短歌を考察する。

## *Nisei Daughter* の描く母親像

前述したように、本書は、6歳の少女モニカが自分はジャパニーズだという事実を母親から告げられるところから始まる。母親は「静かに落ち着き払って」この事実を告げ、少女に公立学校

の放課後に日本語学校に通うように命じる。この「衝撃的発見」で「幸福」だった少女の心と暮らしは一変する [Sone, 5-6]。

母親は、現栃木県佐野市の組合派教会のナガシマ・ヨハチ [永島与八] 師の次女ベンコ [弁子] で、アメリカの自由と教育の機会を求めた父親の意向で、一家で渡米、糸井氏の求婚を受けるが、知らない人とは結婚できないと泣いて抵抗した。父親に説得され、交際をはじめ、ほどなくして結婚し、ヘンリー、モニカ、スミコを生む [Sone, 6-7]。アメリカ政府の強制収容所記録には、Ben N. Itoi, 1898年生まれ、1916年渡米と記されている<sup>5</sup>。ベンとは本名のベンコの略、Nはナガシマのイニシャルであろう。アメリカ人風のファーストネームを持ち、ミドルネームをイニシャル化しているところに、一般の一世とは異なり、アメリカ化していることが感じられる。

彼女は、「生き生きとしたアーモンド型の目をした」、「ほっそりとしてかわいらしい5フィートの」、「楽しい」人だったと形容されている [Sone, 14]。彼女の実家がキリスト教の牧師<sup>6</sup>の家であったことを考えると、当時の日本ではかなりリベラルな家風で育ったと想像できる。しかも女学校を卒業してすぐに渡米したため、娘モニカの目から見ると、「母は、17歳というエネルギッシュで好奇心の強い、[母親となるには] 不都合な年齢でアメリカにやってきた。日本文化はまだしっかり固まっていなかった」のであった [Sone, 48]。要するに、いわゆる花嫁修業が不十分な状態で結婚、親となった。実際、若くして結婚したため、当初は家事には疎く、夫から料理を学ぶほどだった [Sone, 13]。

そのため、同郷で10才も年上のマツイ夫人から家事や子育ての指導を受けることになる [Sone, 16]。努力の結果、日本女性らしい振る舞いを身につけ、子供にも必要な場面では日本的な行儀作法を守らせられるようになった。

母親は、他の一世夫人に比べ、アメリカ化していたとはいえ、日本人としての誇りは強く持っていた。おとなしく夫に付き従うだけの存在ではなかった。密造酒の疑いをかけて、袖の下を要求する警察官に対して、断固抗議する毅然さも併せ持っていた [Sone, 34-42]。また子供たちが偏見差別を受けて、ジャパニーズであることに屈辱を感じるような場面では、「自分の価値を大事にしろ。白人であろうと、黒人であろうと、黄色人種であろうと、かわりなく、人間であるからです。そのことを忘れてはいけません。」と諭している [Sone, 114]。

*Nisei Daughter* のなかには、母親の短歌<sup>7</sup>に関する言及がたびたびある。子供たちが、短歌の「ナリケリ」を用いて、からかいの種とする場面が何度か記述されている。また、母親が美しい風景に感じて短歌を詠む場面もある。母親は、多忙なホテル業務の傍ら、自分の小さな机をもち、短歌を詠み、本を読むほど努力家であった [Sone, 10]。

他の一世たちの前ではしとやかで感情をまったく見せない日本女性を演じていても、娘の目には、母親は本質的に感受性が強かった [Sone, 48]。その感受性は短歌を詠むことで磨きかけられたのであろう。強制立退で、シアトル近郊のピュアラップ共進会場の仮収容所に着いたとき、とっさに小さなタンポポを抜く、と言い張る。その直ぐ後には、ベンジョが近いことに幸運だったとつぶやく。可憐に咲くタンポポに感動するほど詩的であると同時に、日常生活の便利さを考える実利性を兼ね備えていることに、家族は笑ってしまう [Sone, 174-175]。

ヘンリーが志願するとき、母親は「過去を考えるのは止める時でしょう。今は息子たちとともに歩むべきでしょう。少なくともこれくらいしかできないから」と言って、息子の志願を認める

のである [Sone, 200]。

## 日系アメリカ人強制収容期の短歌

日米戦争勃発によって、日本人移民社会の指導者層は、FBI 等情報機関によって逮捕、抑留されたが、一般のジャパニーズもアメリカ市民権の有無を問わず、1942年春から順次、西海岸の防衛地区から強制退去、内陸部へ強制収容された。収容所内では当初の混乱が収まると、被収容者はそれぞれに余暇活動を再開した。短歌に親しんでいた人々も例外ではなかった。収容所内で歌会を開き、作品を、収容所で発行された新聞の日本語面や、戦中も発行が許されていた外部の『ユタ日報』などに発表した。また短歌雑誌や歌集も編纂発行された。

糸井野菊は、家族とともに、シアトル近郊のピュアラップ仮収容所へ、やがてミネドカ収容所に送られた。彼女の短歌は、『ユタ日報』の他、ミネドカ収容所の新聞『ミネドカイリゲーター』日本語面<sup>8</sup>、『峯土香短歌』、『(東津久仁) 高原』<sup>9</sup>などに収録されている。

このうち、『峯土香短歌』(1944年6月)は、「後記」によれば田中韋城が選歌、それを糸井野菊、中村郁子がさらに絞ったという。峯土香短歌会は田中韋城ら創設したが、田中はツーリレーキへ移送されたので、最後の選定はミネドカに残った歌人のなかで中心的な二人が担ったのであろう。同歌集は、峯土香短歌会の1942年11月から43年12月までの歌を収録した。収められているのは、新井冬村、越後桂子、浜徳太郎、土屋輝江、疋田佳子、檜山水府、堀内武子、糸井野菊、菅野忠四郎、神部孝子、金子伸三、金子竹代、柏木天浪、川田頼子、菊地静波、三原かつの、宮崎妙子、望月秀一、村上静子、村岡鬼堂、中川筆枝、中川末子、中村郁子、中村ます子、中田洋舟、仁熊登美子、野村鷹声、大場砂丘、大場まゆみ、小田切田鶴子、渋川忠八、炭谷慶造、寺沢秋二、鳶川八千代、田中韋城、深見さえ子、春野陽子、岩月静恵、真杉茂、三原泉流、中津甲、佐々木みどりら、218首<sup>10</sup>が数えられている。

(東津久仁) 高原短歌会は、1935年ロサンゼルスを中心に泊良彦が中心に興した東津久仁短歌会を前身とする。『東津久仁』は隔月で発行され、1940年には『東津久仁五周年記念号』が出版された。日米戦争で、『東津久仁』は休刊したが、泊は44年4月から『高原』をツーリレーキ隔離収容所で発行した。この『高原』には、中表紙に東津久仁の名が付されていた<sup>11</sup>ので、『東津久仁』は休刊したと述べられてはいるが、実質的には、継続していたと考えても良いだろう。高原短歌会は、『東津久仁高原短歌会昭和十八年業績抄』を1944年2月に発行している。ツーリレーキでは印刷できなかったため、ミネドカ収容所で印刷されたという。41頁、収録作者62名、264首を収めた<sup>12</sup>。高原は、1944年4月に始まって、隔月発行が基準であったと思われるが、毎月の場合もあった。12号まで続けられた。10号発刊を記念して、『東津久仁高原業績抄第二輯』が1945年8月にツーリレーキ隔離収容所で発行された。泊良彦の「後記」によれば、「時局柄発表を控えてきた歌も相当あり」、「自然詠を多数とする」のもそのためであろう、という。作家は、他の収容所や所外からも収録され、アリゾナ州ポストン収容所では、永瀬勇、児玉なを、貴家しま子、鈴木縁松、大空魁、高橋東民、アリゾナ州ヒラ収容所では田名ともゑ、松浦清子、アイダホ州ミネドカ収容所では、中村郁子、糸井野菊、野村鷹声、越後桂子、中川末子、疋田桂子<sup>13</sup>、三原かつの、岩月静恵、大場真弓、同州の所外からは阿部たみ子、山本徳之助、ユタ州トバズ収

収容所では高山要造、故村越光子、贅田清子、同州の所外からは林田美都子、ワイオミング州ハートマウンテン収容所は加藤はるゑ、西村津矢子、梅本静恵、吉田春江、故比美美千代、コロラド州からは和多田ゑん、上田綾子、同州のグラナダ収容所は、原哀叫、防衛地区外の、東北部諸州からは鹿島倫子、尾川清子、安島きち、三保周策、佐藤不二子、カリフォルニア州マンザナ収容所岩田立枝、同州ツーリレー収容所泊良彦が名を連ねる。

## 糸井野菊の短歌について

短歌の発表年月日は、必ずしも制作年月日を示すものではないので、本稿では、その内容で時系列に配列する<sup>14</sup>。

シアトルの日本語新聞『北米時事』の歌壇欄によれば、日米戦争開戦の12月7日午後3時から華陽会<sup>15</sup>の歌会が主催者の田中韋城宅で開かれたが、糸井野菊は欠席であった[1941年12月22日]。同新聞休刊前の最後の彼女の作品は、最後の船で日本に帰国する友へ送る歌であった。そのなかに、

波高き太平洋をかへりゆくこの御用船に乗って友かへり行く  
国交の危きときし妻子卒て帰国<sup>い かえり</sup>ゆくはそも誇か

という歌がある。両歌とも、日米関係の不穏さを詠み込んでいるが、後者からは作者のなんとも言い難い複雑な心境が伝わってくる。

日米戦争開戦にあたっての短歌は残念ながら未見である。日記やノートに書き留められたかもしれないが、おそらくは、開戦の報に「コマッタネ」とつぶやき、茫然自失してしまった[Sone, 146] ために、作られなかったとも考えられる。

夜具袋靴を負ひ持ちて押し込まるがにバスに乗りたり [『ユタ日報』1942年12月25日]

この歌は、重い荷を持ってバスに押し込まれた悔しさが詠まれている。「バス」という言葉から、おそらくはシアトルから仮収容所に向かう強制立退の情景であろう。次の二首は仮収容所からミネドカ強制収容所に送られるときの心境を詠んでいる。

両の手にあまる荷物を各々持ち看視兵の視線におされて乗り込む [『ユタ日報』1943年4月9日]

移動されてゆくさきの状態得わかねばただに憂ひて荷はつくるなり [『ユタ日報』1943年9月22日]

前者には「ピヤロップ出発」と但し書きがあり、後者は「ミネドカ短歌会詠草」欄になっている。ただ、後者は荷作りの出発準備の心細さ、前者は汽車に乗り込む情景である。看視兵の視線は、「おされて」という言葉から判断すると、きつかった。双手にあまる荷物は重かったであろう。

老若男女、黙々と堪え忍ぶ姿が浮かぶ。後に編纂された『高原業績抄第二輯』にも

双<sup>も</sup>の手にあまる荷をさげおのおのも監視兵の視線に圧され乗りこむ [19頁]

という一首がある。但し書きに寄れば、1942年8月15日に「ピアラップよりアイダホに移さる」とある。「各々」を「おのおのおの」と平仮名書きに、「おされ」を「圧され」と漢字表記に変えることで、前述の歌よりも、一人一人の重苦しい心境が伝わってくる。屈従の情景が一人一人に視線を向けることで、対象が具象化され、作者の静かな怒りが伝わってくる効果を生んだ。屈辱感と怒りは、後に編纂された『峯土香短歌』では、

かためる看視兵のまへを眼あげて乗車<sup>のり</sup>つゝくやし手の荷の重さ [4頁]

と、いっそう率直に詠み込まれている。

不安な心持ちで移動した先は、

北斗星低く雪荒漠に光りて落ちし星の悲しさ [『ユタ日報』1943年3月22日]

と寒々とした荒原であった。そこでの生活は、みじめであった。

どぶどろの泥濘<sup>どろ</sup>むなかに佇<sup>たたず</sup>ちなづみ飯待つ列に吾れは黙<sup>もく</sup>居り [『峯土香短歌』4頁]

皺<sup>しわ</sup>の翁もならび土砂降りの雨にぬれつゝ飯待つあはれ [同上]

収容所では、食堂で食事をする。あてがい扶持の食事を貰うことは一世には屈辱だった。それでも、炎天下であろうと、大雨であろうと、老若男女、等しく長蛇の列を作り、おとなしく順番を待って、食べねばならない。前者の歌には、屈辱感が、後者の歌には、同情と理不尽さへの怒りが詠み込まれている。老人の食堂行きの光景は、

杖に身を支へながらも日に三度<sup>さんど</sup>食堂に通はす翁ありけり

という歌もある。独り身の高齢者は、凍土であろうと、ぬかるみであろうと、炎天下であろうと、日に三度、食堂まで歩かなければならなかった。「翁ありけり」と事実を述べるに留めたところに、作者の静かな怒りが伝わってくる。

糸井野菊は、当初看護の仕事についた。

病みながら砂漠のなかに移動されてきし同胞をわが看護つつ [Irrigator 1943年11月20日]

隔離病舎の焼場に仰ぐ夏の朝日わが着る服のあらほに白し(病院勤務) [『高原業績抄第二輯』20頁]

亡骸ををさむる室に運ばれし今朝の死人の髪黒かりき [同上]

最初の歌は、仮収容所からミネドカ収容所へ移動した直後に作られたのであろう。最後の一首には「髪黒かりき」という言葉に、収容所で早世した人を悼む気持ちが伝わってくる。

やがて糸井野菊は食堂勤務へと仕事を変える。『短歌雑誌高原東津久仁五号』（1944年10月号）には

ベルの鳴る時計をまきて早寝する夜の暑さはねつつ堪へむか  
新しき職場をもちて早寝せし夜をいく度か吾が眼ざめつつ  
初めての務めにいづる朝醒めて生き生き鳴ける鶏のこえきく  
朝月の光りおぼめく庭草に石灯籠の影を見にけり  
皿の音込合ふ朝の食堂に今日の暑さがすでに兆し来  
日糸兵戦死の電報つぎてくる暗きうはさのメスに茶をくむ<sup>16</sup>

と、「つとめ」と題して詠まれている。第一首は、高原とは言え、内陸部の夏の夜の暑さを、第三首は高原の朝のすがすがしさを詠んでいる。鶏の声は、雄鶏が一羽、遠くで朝を告げている光景を想像したいが、収容所で行われた養鶏を考えると、かなりの騒々しさであったろう。「初めての務め」で張り切る作者の心持ちで、「生き生き」と聞こえたのである。第五首は、「兆し来」という言葉で、今日も暑いことの他に、食堂の賑わいが一層増して、騒がしくなってくる気配が伝わってくる。最後の一首は、夕食後、人の少なくなった食堂で、老人たちが声をひそめて話し込んでいる光景が浮かぶ。作者も志願兵となったわが子を思って、しみりと茶を入れていたのであろうか。

収容所内で詠まれた糸井野菊の歌には、自然詠が少ない。以下、自然詠と思われるのは、

はつ日光さしくるおそき高原の黎？<sup>17</sup>空にメスの鐘鳴る [Irrigator 1944年1月1日]  
セイヂ原に童らが遊びのあはれなりカヨテ群れ哭く声まねびつつ [『高原業績抄第二輯』20頁]  
眼を閉ぢて眠りゆくまでしまらくを耳に侘びきく掘河の音 [『東津久仁高原二号』、1944年6月13頁]  
ひと夜さのねむり醒めたる朝床に今日のどよみがすでにきこゆる [同上]  
しろじろと春の朝雨降りけぶる荒原にはすでに壁蝨が生れるむ [同上]  
ま夏陽の赤く傾く砂漠の上セーチが焼く煙黄にあがる [『東津久仁高原四号』1944年9月、3頁]  
焼けてゐる野面より吹く風熱しき庭の蟬が息喘ぎ啼く [同上、4頁]  
燃え上る煙は赭く夕焼の雲の下びにみだれかたむく [同上、4頁]

自然を詠み込んだ歌を資料からすべて選んだが、このなかで、純粋に自然を詠んだものは少ない。最初の一首は、収容所の新聞日本語面に迎春用として掲載されたもの。「メスの鐘」という言葉からの、収容所であることを想起させ、それでものどかな正月風景を迎えている喜びを詠む。第二首は、教育的な遊び場も道具も不足する収容所のこどもたちが、コヨーテの鳴き声を真似て遊

んでいる光景を目にして、彼等の将来を憂う心が伝わる。第三首も、「堀河」という言葉から、灌漑用に掘った被収容者の苦勞が思い出される。第四首は、早朝の人々のざわめきが、第五首では、ダニの季節がまもなくやってくる憂いが詠まれている。最後の三首は、山火事を詠んでいる。『華陽』に収められた5首のうち、自然詠が2首であったことを考えると、時事詠を詠むのが個性だったとも思える。

収容所内の人々へも怒りが向けられている。『東津久仁高原六月一日号』(二号)には、

はらからが同胞をとかくあげつらひ己れ善がりの多くもあるか  
誰ひとり叫ぶものなく暴利屋が売りこむ品をきそひあがなふ<sup>18</sup> [13頁]

この二首からは、作者の強い正義感が伝わってくる。

二世の従軍は、志願であろうと、徴兵であろうと、アメリカを敵国とする日本国籍の親たちには無視できない大問題であった。前述のように糸井野菊の一人息子も志願兵となった。当然ながら、息子と重ね併せ、二世兵士に関する多くの歌が詠まれた。Irrigator には、

自が生命国にささげて征く日系兵の覚悟をさへも疑ふべしや [1944年7月1日]  
手を振りてバスの窓より別れ征く兵の明るさ讃めつつ泣きぬ [1944年8月19日]  
戦場に行方知らぬみ子の上ひそかにたのむ父の心は<sup>19</sup> [1944年9月30日]

の三首が寄せられている。最初の歌では、二世が強制収容所から出征してもなお日系人の忠誠を疑い続けるのか、と怒りが感じられる。次の歌は、出征する若者のくったくのない笑顔に、あっぱれと賞讃しつつも、その若さにかえて涙する。最後の歌は、父親のゆれる心を詠んだものであるが、母の心と詠んでも変わらない。

『東津久仁高原』には四号で、

はらからが敵と味方にわかれ討つことは昔の武士にもありき  
生れたる国に疎まれその親に譏られ征きて戦死にし二世らはや  
戦場には用なしとポケットのわづかなる金を貸しき父母に残しき [3頁]

と詠まれている。最初の一首は、アメリカに志願することは親の祖国、日本、へ弓引く行為だと非難する声に、反論したものであろう。二番目の歌は、祖国からも親からも邪険に扱われながらも、敵地で命を落とす二世への哀悼の歌である。二世は、アメリカ市民でありながら敵国日本人と同列に扱われて強制収容され、鉄柵のなかで従軍することを求められた。一世のなかには、敵国アメリカに与するなどもってのほかだと、息子の志願に反対する、あるいは嘆く親もあった。このままでは犬死にも同然だと、二世を悼み、同時に彼等の誠を分かろうとしない政府や親たちに対する憤りも伝わってくる。そうした親たちに比べて、二世はなんと親孝行なことよと、最後の歌は詠んでいる。

歌集の『峯土香短歌』には、

學な<sup>く</sup>かば逐はれきし子が志願して祖国に命を捧ぐといふはや  
あめりかに生まれ子等が活くる道四方結界ゆ塞かれむとす  
ある青年（もの）はその親にさへひた秘めて志願せしとふ心に泣かゆ [4 頁]

という歌が収録されている。最初の歌は大学卒業目前で強制立退・収容され、収容所内から二世部隊創設の呼び声に応じて志願した二世を詠んだものである。二番目は、防衛地区外に就職や教育の機会を求めながらも、思うに任せない状況を詠んだものであろう。モニカも出所して得た最初の仕事では、低賃金で失神するまでこき使かわれた [221-225]。最後の一首は、前述の「生れたる国に疎まれその親に譏られ征きて戦死にし二世らはや」と同じ心境を歌ったものである。同様の内容は、俳句や川柳にも詠まれている。

政府の再定住政策推進により、防衛地区外への就職あるいは就学で、若い世代は収容所を出て行った。収容所には、

早起きの一組ありて朝の餉にそろふ顔振れはみな老あはれ [『高原業績抄第二輯』20頁]

と老人が多く残ることとなった。糸井家でも、長男のヘンリーは志願し、モニカは勉学のために出所した。おそらくは、夫の看病のためであろう、野菊は収容所に留まっていた。『第十号高原』には、

診察台の夫を診<sup>み</sup>たまふくすしらの気配はすでにただならぬものを  
まかせたる心は言ひつ床の上に手術まつ夫の髭剃るわれは  
手術室に運ばれしあとの枕べに夫の時計がときざむ音  
健けき身によこたへて眠るときひとりありがたし夫病む今を [以上7頁]  
夕餉のもの足らなさを小夜ふけの寝<sup>ね</sup>際に夫の言ひいでにけり  
戦況を暗く語りてとぎれしあと夫と吾と二人慰さめあひぬ [二首8頁]

と、手術前、術後、快復期と、夫の容態を気遣う妻の様子が時の経過とともに詠み込まれている。最後の一首は、敗色濃厚となった日本を憂う夫妻の心境が詠まれている。最後の二首の前に、

死骸を鞭持ちかこむ群衆のなかに女の顔嘲笑<sup>わら</sup>へる（写真ムッソリーニ殺さる）

という歌が置かれている。Irrigator の1945年5月26日の紙面には、

大統領逝きしニュースは天暗く吹雪く夕べのメスに伝はる

と詠まれている。世界情勢は大きく変化し、第二次世界大戦の戦局は最終局面を迎えていた。

実際には、アメリカ政府は戦争終結を待たず、1944年12月17日に西海岸への帰還許可を（1945



年1月2日発効), さらに7月13日に、ツーリレーキ隔離収容所以外の収容所を閉鎖すると発表した。それでも出所は政府が期待したほど順調ではなかった。

鉄柵より釈放たれしごと出でゆきて旅に幾度職を追はるる(ある友)『高原業績抄第二輯』19頁]

あるいは、

殺傷事件つき勃る記事はへだてたる砂漠によみて憤るのみ [Irrigator 1944年8月12日]

と詠まれているように、出所者は外部世界の偏見差別に苦しめられた。暴力事件等の報道に接すると、土地勘もなく、人脈もなく、英語も話せない人々が出所をためらうのは当然であつたろう。

西海岸への帰還許可は食堂で昼食中に発表された。『東津久仁高原八号』(1945年3月)には、「退去令撤廃発表」の題で、

同胞にかかはる憂ひ下心にもち昼餉のフォークはおきて聴き沈む  
反響は如何にあらむと眼をあげし吾れのめぐりの人黙深し  
出所ゆくにあてどもなしと皿のものの食べはじめたる翁が咳く  
退去撤廃、自由帰還とひびきよく聞きたる後に重くこだはる<sup>20</sup>  
食堂の低きどよみは耳底に気遠くききつ病夫おもふ吾れは  
足下の土に埋る石ふみつけてる彼の顔も憂をふくむ

と詠まれている。そのときの糸井野菊の行動が手に取るように詠み込まれている。発表にどよめきではなく、重い沈黙が食堂を覆った。みな食事の手を休めて、聞き入っていた。糸井野菊も黙ってうつむいたが、好奇心が勝って周囲を見回す。みな押し黙っている。すると近くの老人が、行くあてなぞない、とぼつりとつぶやく。糸井野菊はその声に、我に返る。帰還が許されたなどと、まるで自由と民主主義の勝利かのように政府はもったいぶるが、すべてを取り上げて、収容所に押し込めて、今度は勝手に出て行け、それはないだろう、と思う。「こだわる」という言葉に、収容されている人々の、納得の行かない、わだかまりが読み取れる。実際術後の夫をかかえて、どこに行けばよいのか、目前の出所に不安がよぎる。夫も不安が隠せない。

やがて、糸井夫妻も出所して、シアトルに戻る。『高原十一号』(1945年9月)には、

日昏よりオレゴン山ぞひをひた走るわが汽車の笛は鳴りつぎにけり [8頁]

と、ミネソカから、カスケード山脈を越えて、シアトルへ帰る汽車旅が詠まれている。「鳴りつぎにけり」という言葉から、帰りを急ぐ作者の心が伝わってくる。しかし危ぶまれたように、シアトルではまともな住まいを確保することは不可能だった。

地下室をともし<sup>いぬ</sup>寝る夜の壁に籠り鳴るもの水管ならむ  
水管に水流るらむまがな<sup>い</sup>しき音ぞきこゆる夜更けの壁に  
帰還り来し街空いく日曇りつぎて湿気は匂ふ地下室の壁より  
地下室の壁高くきりし小窓ありて折々靴が光りすぎゆく  
<sup>あしなえ</sup>跛のギリシャ人住める二階より重き音がときどき響く

じめじめとした地下室によりやく荷をほどいたのである。戦前ホテル業を営み、日系人社会では恵まれた生活を送っていた夫妻にとっては、苦しい再出発であった。

戦争は終わった。原爆投下から敗戦へと続く心境を、「噫祖国」と題して、糸井野菊は15首を『短歌高原同人十二号』（1945年11月）に寄せている。

原子爆弾あしたに聞きて昼にきく蘇聯参戦が一気に聞 [せめ]<sup>21</sup> ぐ （八月八日）  
由々しかる祖国おもへば八衢 [やちまた] 光りのなかに息迫りたり  
広島の大惨禍なほ洩りがたしともだえきくとき長崎もまた  
長崎の惨禍を日ふにハンドレットパセントサクセスフルなりと誇るかアメリカのラヂオは

広島原爆投下、ソ連参戦、長崎原爆投下、糸井野菊の切迫した想いが伝わってくる。「誇るか」という言葉に、人道をはずれた原爆投下成功を喜ぶアメリカへの失望感とも怒りともいえる感情が伝わってくる。

（恰も昨年夏八月八日の夜 畏くも明治大帝を夢みき）  
闇き夜の野河のほとりに佇ち迷ふ民を統べさす御姿を夢し  
夢ながら畏きゆめとぞ消ちがたみ寂しみ秘めて人に語らず  
原子爆弾の惨禍をきけばあなかしこ去夏<sup>こ</sup>の正夢おもほゆるかも

一年前の8月8日に、明治天皇が日本国民を案じる夢を見たことを、原爆投下の報で思い出し、正夢だったと思う。

（八月十四日 米国時間午後四時祖国休戦の報と共に米全土に戦勝のサイレン鳴り出づ 時に買物の途上にあり）

戦勝の汽笛鳴りどよむ八巷に在るにありがたし日本人吾れは  
捷ち得しは正に敵なり<sup>われ</sup>我国ならずと夢ならぬもの現にまつはる

サイレン鳴り響き人々が喜びあうシアトルの街の喧噪が詠まれている。その喧噪は

灯を消して暗くこもれる家のめぐり花火・ピストルが夜半まで響く  
捷ち得たる国のどよみを伝ひくるラヂオも敵国に聞きて余すなし

夜までも続いた。そして

(同午後八時仏語にて休戦を宣言し給ふか)

全世界に今し宣言<sup>の</sup>べさす御詔勅<sup>みことのり</sup>かしこきろかも御声沁みつも  
御詔勅<sup>の</sup>拝すすなはち皇軍五百万は矛ををさめて一糸乱さず  
大アジアに日本ひとり覚醒<sup>め</sup>めしがけだしやも今日の禍ひなりき  
持ちたるが持たざる国と戦ひて勝ちたるはあはれ空しきに似つ

敗戦を告げる天皇の言葉を電波で聞く。二番目の歌の「一糸乱さず」という言葉に、祖国日本への誇りが、三番目の「日本ひとり覚醒めし」、「今日の禍」という言葉から、日本は白人支配の理不尽な世界に挑戦しようとしたのだという、糸井野菊の想いが感じられる。最後の歌からは、結局、物量で日本は負け戦を戦ったのだというあきらめが吐露されている。

## おわりにかえて

娘が描く *Nisei Daughter* の母は、表向きは教養ある一世の夫人として振る舞えたが、本質的には感情豊かな、ユーモアのある女性だった。短歌作品から伺える糸井野菊は、「時局柄発表を控え」る歌人ではなかった。時代を見つめ、批判し、発表する勇気をもっていた。自然詠に逃れて収容所生活のストレス発散を求めることはせず、糸井野菊は今の時代を歌に捉え、日々の想いを率直に詠んだ。感情豊かであっても、情緒に流されず、自分の意見を持ち、それを語ることでできる女性であった。ヒサエ・ヤマモトの「十七文字」が描く堪え忍ぶ母ではなかった。

アメリカの日本語文学には、糸井野菊の短歌にとどまらない、豊富な作品の蓄積がある。しかし、アメリカの日本語文学は日本文学研究とアメリカ文学研究との狭間にあって、日米いずれの国においても周辺化され、顧みられることが少なかった。アメリカ研究、少なくとも日系アメリカ人研究の分野では、娘（二世）の声を通してではなく、直接母（一世）の声を聞かなければ正しい文学／歴史の理解は得られないことを、糸井野菊の作品は物語っている。

## 注

1. Monica Sone, *Nisei Daughter* (1953), (Seattle: University of Washington Press, 1987).
2. 日系人研究では、アメリカに移民した人々を一世と、アメリカ生まれの第一世代を二世と呼ぶ。二世は憲法の規定によって、出生によりアメリカ市民権を得た。一世はアメリカに帰化することのできない外国人で、国籍は日本国民であった。
3. Japanese という言葉は、アメリカでは国籍の如何にかかわらず、日系である人々に用いられた。本稿では、原語をカタカナ表記することで、ジャパニーズとしてアメリカ社会で周辺化されたエスニック集団であるニュアンスをあらわすためにジャパニーズとすることにした。現在は、Nikkei という言葉も用いられる。
4. 下村とくの日記（未公開）には教会等で活動する様子が記されている。
5. <http://www.japaneserelocation.org/index.php?page=directory&rec=95729>. 2017年7月30日閲覧。
6. *Nisei Daughter* には Reverend Nagashima と記述されていたので、牧師と訳したが確証はない。

7. 『北米時事』の歌壇欄を通覧したところでは、華陽会や紫の会に属し、短歌を寄せていた。
8. 『ミネドーカイリゲータ』(Minidoka the Irrigator) 1942年10月2日～45年7月28日まで、マイクロフィルムとして閲覧可能である。Minidoka はミネドカ、ミニドカ、峠土香、峯土香などと表記される。日本語紙面は限られており、短歌の掲載は少ない。
9. 東津久仁短歌会は、現在もサンフランシスコを中心に活動している。
10. 天浪の「編輯後記」によれば、作家41名、220首とある。
11. 表紙は「高原」であるが、中表紙には「東津久仁高原」(2, 4, 6, 8, 12号)あるいは「短歌雑誌高原東津久仁」(5号)と記されていた。7, 10, 11号は「高原」のみである。
12. 現在情報のみで、手元にはコピーはない。
13. 桂と佳の二通りの表記がある。
14. 本稿では旧字体の漢字は新字体に改めた。
15. 1927年に創立1年を記念して出版された『華陽』にも糸井野菊の作品が5首掲載されている。亡くなったわが子を悼む歌2首、生活をよむもの1、自然詠2である。
16. 『高原業績抄第二輯』には、「ハント兵戦死の電報〔しらせ〕つぎてくる暗き噂のメスに茶をくむ(再就職)」と詠まれている。20頁。
17. 手書き、謄写版刷り等、紙面の質が悪く、文字判読不能。
18. 『高原業績抄第二輯』には、「同胞がはらからをとかくあげつらひ己れ善がりの多くもあるか」、「誰一人叫ぶものなく暴利屋が売り込む食料品〔しな〕を競ひあがなふ」(キャンテン)と書かれている。
19. 『東津久仁高原四号』には、同首が掲載されているが、「たのむ」という語は、「恃む」という字が当てられている。3頁。
20. 『東津久仁業績抄第二輯』20頁には、「出所ゆくにあてどもなしと皿のもの喰べはじめたる翁がつぶやく」、「退去撤廃・自由帰還とひびきよく聴きたる後に重くこたはる」と記述されている。
21. 字がかすれていて、判読困難であった。